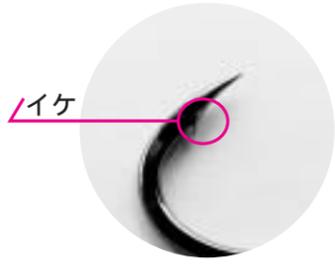


日本一の伝統産業、釣針



イケと呼ばれる返しの部分があることで、魚の口に針がかかり、外れにくいようになっています。この部分を作る工程が最初に機械化されました。



釣針を全て手で作っていた時代の作業台



小寺彦兵衛肖像画

海はないけど、釣針はある

「海に面していない加東市。内陸のこの地で釣針が盛んに作られているのは、なぜですか？」
兵庫県釣針協同組合（加東市吉井）には、こんな質問がよくあるそうです。

海のないこの土地に釣針が持ち込まれた理由は諸説あるそうですが、その中でも、当時の下久米村（現在の下久米）に住んでいた小寺彦兵衛という庄屋が、この地に釣針産業を持ち込んだ、元祖・釣針職人だといわれています。彼は、農民が飢餓に苦しむのを見て何とかしたいと思い立ち、土佐（現在の高知県）に釣針作りの修行に出かけ、苦心の末その技術を習得。身につけた釣針作りの技術を下久米村以外にも広く教え、遠くは岡山や広島の方まで伝わったといわれています。

なぜ、釣針なのか

彦兵衛が釣針に注目したのは、次のような利点があったからでした。
・加古川舟運があるため、材料が手に入りやすい。
・小さくて持ち運びが容易。
・持ち運びの際に傷つくことが少なく、収益が大きい。
これらのメリットは、田畑が不作であっても安定した収入を得ることができるといふことで、彦兵衛は釣針を副業として習得することにした。

彦兵衛の釣針

土佐に渡った彦兵衛は、簡単には技術を教えてもらえず、大変な苦勞をしたようです。釣針職人に何とかして出会うために、四国八十八か所を巡るお遍路さんとなって職人と知り合い見習いとして住み込んだとか、釣針職人の家の前で行き倒れを装いつけてもらったなどの伝説も残っているほどです。

このような苦勞を経験しても、釣針製造を営む各社で門外不出とされている「焼き入れ」の技術は教えてもらえなかったようで、嘉永四（一八五二）年に下久米村に戻ってきた彦兵衛は独自に研究を重ね、失敗を繰り返した末に、やっと「焼き入れ」の技術を発見したそうです。
ここに彦兵衛の全て手作りの釣針が完成したのでした。

彦兵衛と「寿永講」

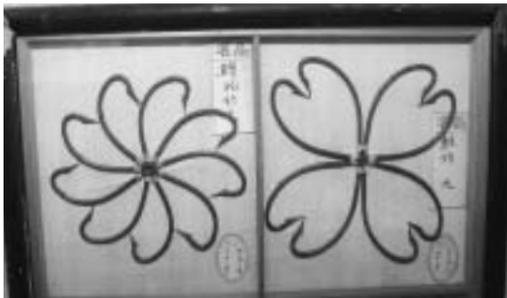
彦兵衛は多くの弟子を取り、自分が身につけた技術を惜しみなく教えました。そして作った針を正当な値段で販売するために、同業者で組合を作りしました。それが「寿永講」です。「寿永講」では、釣針を作るための材料を仕入れ、それを職人に売り、でき上がった釣針は「寿永講」が買い取り、行商や各地の問屋などに売るといふ仕組みで、厳しい規則も定められていました。その定めを破ったものには、罰も科されています。現代の組合の基礎となった組織であるといえるでしょう。



魚の種類や大きさにあわせて、はかり知れないほどの種類がある釣針。

兵庫県の釣針生産量は、全国の90%以上を占めています。中でも多品種、高品質を誇る東条の釣針は県内でも有数の生産量を誇っています。

今回は、そんな日本一を誇る伝統産業でふるさとを支えている「釣針」を紹介します。



右は大正時代に釣針を使って飾られた屏風。よく見ると左の写真のように格子の中に釣針を使って作られた様々な形の花や、釣り糸などが飾られています。実はこの屏風、釣針や糸の名前値段などが書かれた日本の役割も果たしています。うーん、なんと合理的

